

花譜卷之中

正月

梅 萬葉集に、うめとも、むめともよめり。冬より二月に至るまで花をひらく。此花百花にさきだちてひらき、花の兄なるゆへに、百花魁くはいと稱す。雪霜をしのぎて、君子の操みさほあり。且清香粉色もろもろの花にすぐれて、いとめでたし。故に和漢ともに、富貴貧賤智愚賢不肖をへだてず、なべて古今の人の玩賞きはまりなく、詩歌の詠も又はなほだ多おほし。花園をひらくには、かならずまづ梅を以て、第一の上首としてうへずといふ事なし。梅の種類多おほし。大むね紅白のひとへ八重あり。其うちの品はあげてかぞへがたし。中について、白きひとへを以て第一の品とす。野にあるを江梅といふ。又野梅といふ。范至能はんしにのうが梅譜にいづる。

白梅はきよく、紅梅は艶なり。白梅はすべて香あ

り。紅梅は香あるあり、なきもあり。寒紅梅は八重なれば香なし。九月に花さく。これ梅のいとはやさものなり。淺香山、これにつぎてはやくひろく。ひとへの紅梅なり。凡冬至より前にひろくを早梅といひ。山中、平原、また地の寒温ウンによりて、花の遅速あり。消梅シナムメ、花も實もちいさく、豊後梅は、花も實も大なり。すべて草木は地によりてよろしきあり、よろしからざるありといへ共、梅は黒土、砂土、山中、海邊、寒郷、暖郷、何れの地にうへても、よろしからずといふ事なし。且又、梅はうつしうふるに、こと木より活つきやすし。大なる木をうつすには、其枝の大なるを切すつべし。うへて後、根まはりに、溝みぞの泥どろをおけば、活つきやすし。梅をつぐには、春分ののち、桃ももか杏あんの臺だいにつぎてよし。これ農政全書に出たり。或曰、桃ももの木きの臺だいをひきくきりて、梅をつぐべし。活つきやすく、さかへやすし。梅に梅をつげば、活く事すくな

し。花の時雪霜つもれば、實ならず。樹下にけぶ
りをたきて、花を守るべしと、農政全書にいでた
り。○梅は冬より花ひらけぬれと。すべて花は春
をもとゝして、賞翫しやうくわんし侍れば、此月にしるすめ
り。拾遺集の歌に、むめの花はるよりさきに咲し
かぞみる人まれに雪のふりつゝ。とよめるがご
とし。洛西、梅が畑に梅多し。又くらま山、きふ
ね、たか尾、まきののお、とがのおの山中にも多し。
さかりにひらく時遊觀ゆうくわんすべし。獨倚リテ寒村ニ嗅ク野
梅ヲは、騷人の清賞なり。

山茶花つばき つばきは、さかり久しくしていとめでた
し。花は歳寒をおかしてひらき、春にいたりて、
いとさかななり。葉は四時をおひてしぼます。こ
れ又君子の操みさばありと云べし。日本にひかしより、
椿ちんの字をあやまりて、つばきとよむ。椿は漆うるしの木
に似て、其葉かうばし。近年唐もろこしよりわたる。又日
本紀及順和名抄には、つばきを、海石榴とかけ

り。むかしは、つばきの數、すくなかりしが、近代人のこのむによりて、其品類はなほだおほくいでき、あげてかぞへがたし。からの書にも、其類おほき事をしるせり。山つばきいとよし。いろ／＼の變色は、よきもあり、あじきもおほし。九月より花さくもあり。凡つばきは六月につぐ。水つぎよし。さすには赤土あかつちよし。正月或梅雨つゆの中に、させばよく活つく。さして數年の後、花をひらく。葉蟲を生せばさるべし。さらざればいたむ。赤土、黒土を好むこの。砂土にはよろしからずといへども、餘木に比すれば、さまで地をきはらず。凡、山木は赤土、黒土を好むこの。櫻、栗、山茶つばきの類みなしかり。村民山茶をおほくうへて、其實をとりて利とす。山城の日野のさとは、つばきばたけあり。

福壽草 又ふくづ草ともいふ。草のたかさ數寸にすぎず。其葉胡蘿蔔なんたんに似たり。其花くさやまぶきに似て黄なり。春の初花をひらく。故に元日草

といふ。盆にうへて、新春席上の清賞とす。平安城に多し。^{おほ}春秋わかちうふべし。偏鄙^{いなか}には移し植れども、おほくは生ぜず。但所によりてよろしき地あるべし。寒月は、北ふさがりたる暖所にうへて、其うへに、ぬかをおほふべし。且又霜おほひをすべし。夏月は、日かげよろし。五月には、莖葉^{くさば}かれて根はかれず。九月に發生す。此ときほりて、あたふかなる所にうつしうふべし。又盆にうへてよし。濕をいむ。又糞^{こへ}を用ゆべからず。

金盞花 和俗きんせん花と稱す。春の初より花さく。色黄金のごとく、かたちさかづきのごとくなる故に、名づく。子の形は蟲に似たり。實をこりて、春より逐^し時まけば、四時常に花あり。故長春花ともいふ。本草綱目濕草部に、葉を食す、毒なしとあり。

山礬花^{ちんちやう}

又瑞香花^{すい}と名く。和俗ちんちやうけといふ。

其木たかさ三四尺にすぎず。正二月に、ちいさきうす紫なる花を多く^{おほ}ひらく。其かたち丁子に似たり。其香遠し。故に、からにて七里香と云。其葉も又よし。濕地に植れば枯やすし。平地によろしからず。たかき所にうふべし。又根をあらはすべからず。本草に出たる山礬は、ちんちやうけにことなり。されども、他書を多く考へみるに、ちんちやうけなる事、うたがひなし。古今醫統曰、衣をあらふ灰汁^{あく}を澆^{そい}で、蚯蚓^{みづす}をさるべし。あるひは、漆^{うるし}の滓^{かす}を澆^{そい}ば盛長す。花史曰、大凡香花は糞をおそる。瑞香^{はなはた}は甚^{はなはた}し。又曰、濕をにくみ、日をおそる。小便をそ^そいで蚯蚓をさるべし。○梅雨の中にさすべし、活やすし。來年正月にうつしうふべし。又正月二月にもさすべし、つきやすし。○花丁子。木も花も、ちんちやうに似たり。夏は葉をち、冬は葉生ず。十二月花をひらく。○三また、

これもぢんちやうに似たり。

杏花 順和名に、からもふといふ。篤信今案するに、あんずとは、杏子の唐音なり。唐詩畫譜曰、根あさし、大石を以て根におけばさかへ、花實多し。○ひとへあり。八重あり。ひとへは實多し。賤民土地よろしき所に多くうへて、實をとり利をうる。只果とし、食するのみならず。杏仁は切用の藥なり。又杏仁を料理にも用ゆ。紅の八重は、六代となづく。紅梅より花大にしてうるはし。ひらかんとするとき、又さきそめたる色、ことによし。しばみでのちは、はなはだうらめし。實まれなり。凡杏花は、紅梅よりおそく、桃よりはやし。杏實をうふる法、農政全書曰、實の熟したるとき、肉ともに糞土の中に埋^{うづみ}、生じて長四尺ばかりの時に、うつし植^{うゑ}べし。杏をうふるには、人家に近きによりし。しばくうつしうふることなかれ。しばしばうつせば、さかへず。正月に根をきらざるやう

に、根まはりをはりて、濕氣シツキをかよはす。一説には、木の下を、つちにてうつへし。二月には、草をさり。三月には、とをく其まはりをはりて、水を通じ、日ではりには水を澆そそぐべし。雪霜あるときは、樹下にけぶりを焼て、花を守るべし。桃の臺に杏をつげば、實をむすぶ事紅にして、大なり。此木いのちながし。桃には似ず。

辛夷花コヤシ 葉は柿のごとく、花は玉蘭モクレンに似て蓮のごとく、外紫に、うち白し。其藥筆リョウヒツのごとし。故に木筆といふ。二月に花ひらく。

小櫻 春分の頃ひらく。俗に、彼岸櫻といふ。是櫻の別種なり。木も櫻に似たり。

垂絲櫻シズメザクラ ひがん櫻より花やうおそし。是ひがんざくらのしだれたるにて、一類なり。故に、ひがんざくらの臺につぎてよし。たゞの櫻の臺につげば長せず、枯かれやすし。濕地にはあじう。めぐりに木なさがよし。根下ねもとの草をさるべし。此樹庭中にさき

て、扶疎たるはいと愛玩すべし。

櫻　ひとへ櫻、春分の後花をひらく、彼岸櫻より十日ばかり遅し。又八重櫻にさきだつ事、十日斗なり。花のときは、所によりて遅速あり。吉田の兼好は、ひとへ櫻をめでしが、花のさかりは、立春より七十五日の由、徒然草にかけり。されども、今平安城のひとへ櫻は、立春より六十五日をさかりとす。年の寒温によりて遅速あり。さむき年は立春より七十五日にもさかりなるべし。吉野山の櫻も、立春より六十五日をさかりとす。これ又年の寒温によりて、遅速はあれども、大やうはたがはず。吉野山の町より上の方は、六十五日よりは遅し。よしの山は、皆ひとへ櫻なり。ふもとよりさきそめて、やうやくのぼる、奥の院までの間、凡花のさかり三十日ばかり也。多武峰、奈良には、八重櫻おほし。櫻は、いにしへより、日本にて第一賞する花なり。故にたゞ花と稱するは櫻なり。

からの洛陽にて、牡丹を花と稱し、蜀にて、海棠かいとう

を花といふがことし。文選の沈休文が早つとに發定山つとに

詩、王荊公わうけいこうが詩しに、山櫻をつくれり。文選の詩に、

山櫻は果くだものの名、花朱、色火のことし。とあれば、

日本の櫻にはあらず。からのふみに、日本の櫻の

ごさくなるはいまだみず。長崎にて、から人にた

づねしにも、なしとこたふ。朝鮮にはありとい

ふ。凡櫻さくらは、ひとへを以て本とす。故にたゞ櫻と

稱するは、ひとへ櫻なり。山櫻とは、やまにある

をいふ。さとにあるを、山櫻といふは、ひが事な

り。櫻の種類はなほだおほくして。ことごとくあ

げがたし。うば櫻、はなさく事いとはやし。葉な

くして花さく、故に名づく。ひがん櫻に似て、う

す紅白なり。次にひがん櫻、次にいと櫻、また、くま

がへ櫻はやし。次にひとへ櫻、品類ひんるい數種あり。そ

のうちに、にはひ櫻あり。香あり。ひとへ櫻は、

其さかりわづか二三日の間なり。ちる事はやし。

ひとへ櫻すこし衰おとろふるとき、きりがやつさかりな

り。此花、鎌倉のきりがやつより出たりといふ。

やうきひといふ櫻、少紅色をおびたり。又柴山、

車返などいふ櫻あり。いせ櫻は、八重にて、これ

も少紅色をおべり。攝津國伊勢寺より出たりとい

ふ。一説、櫻のおはりにちかき頃さくゆへに、名

づくといふ。伊勢は、尾張にちかければなり。い

せ櫻ののち、諸所のおそ櫻ひらく。虎の尾は、八

重にして葉あをし。泰山府君、鹽がまもおそし。

とらの尾と一時にさく。泰山府君、花のいろ、し

ろく葉あをし。むかし此花のちる事をおしみて、

泰山府君の祭まつりをなせる故に、名づくといふ。鹽が

まは、葉も花も少あかし。花のみならず、はまで

見事なる故、しほがまと名づけらるし。江戸櫻は

いと遅し。葉少あかし。是櫻のおはりに盛なり。

今ごき、知恩院、安井におほし。仁和寺にことに

多く、いと遅おそし。普賢象、いよく遅し。あさぎ

櫻、緋櫻ひ、毬櫻けまり、あけぼのなごいふ櫻あり。京都東山の花おほりて、仁和寺の櫻さかななり。都の西、あらし山に、むかし吉野山の櫻のたねをうつしうへられし故に、山上に藏王堂あり。櫻は近古たえしを、ちかき頃又うえたり。花の盛に、川の北よりみるべし。小鹽山に山櫻おほし。東山より、五六日遅し。攝津國金龍寺コンに、眞櫻といふ花十餘株有。花は八重にて、其葩はなぐさほそし。とらのおの花に似たり。京都のいせ櫻と、同時に盛なり。小原、くらまは、山ぶところにて花遅し。人間四月芳菲盡るときも、やま寺の花は猶さかりにひらく所おほし。江州さかもとも、櫻おほし。河内の獅子の窟イムヤに、彼岸櫻おほし。同國いこまやまの西、鷲尾山の寺には、八重櫻おほし。其下に、ひとへ櫻千株の並木あり。此所花の多き事、吉野山につげり。京都より花のひらく事はやし。江戸にては、上野に櫻多おほし。信濃の諏訪に、彼岸櫻多おほし。

し。寒國故遅し。凡ちからあらん人、花を賞するに心あらば、わがため、人のため、園の内。又はたよりちかき山に、さくらを多くうへて、美觀をなさしむべし。増鏡に、西園寺公綱の歌、山ざくらみねにも尾にもうへおかんみぬ世の春を人やしのぶと。凡櫻は赤土、黒土によろし。砂土によろしからず。吉野山、仁和寺は赤土なり。奈良は黒土なり。又櫻を植るには、山のかたはら、谷のうら、林のまへ、家のあたり、すべてむかひにすきまなき所にあるを、みたるがよし。然らずして、空にむかひ、雲すきにみるは、花の色みえず。

李花 二月に、白花をひらく。關東にあるは花よし。西國にあるは、みるにたらず。もろこしの人、桃と李の花を賞翫す。詩にも多く作れり。關東にある桃李のごとくならば、いと賞するにたえたり。農政全書曰、李は肥地によろしからず。臘月にうつし植べし。間を近くうふべからず。樹下の草

をさるべし。○李は、すきかへしたるやはらかなる地はあしう、みのらず。ふる木もよくなるものなり。正月に、木のまたに石瓦をおほくおくべし。みなる。

連翹 二月に、黃花をひらく。花ちりて後葉生ず。

其莖くきはそながくして、かづらのごとく、二本よりくき多く生ず。くきよはくして、獨り立ことあたはず。樹にすがりてたてり。又竹木をたてゝゆひ付てよし。秋實をむすぶ。藥に用ゆる連翹これなり。又一種、くきのつよきあり。是は物にすがらずして、ひとりたてり。

櫻桃ゆすら

順和名抄には、にはさくらと訓ず。本草曰、始

て生ずるとき、はしきみ榛の葉に似たり。二月に、白花を

ひらく。花多おほくして、雪のごとし。其實百果にさき

だちて熟す。食ふべし。色あかし。四月に熟す。

毒なしといへり。花も實も、すこぶる賞すべし。

唐には、其實の大き彈子のごとくなるありといへ

り。日あてよき所にうふれば、さかへやすし。名
花譜曰、春の中、節ふしある樹をおりて、肥土にさせ
ばつく。又實をまくべし。はやく長じて、花さき
實のる。

山櫻桃にはひら 花はゆすらに似て、いよくちいさし。葉
なく、尖とがりあり。實はちいさくして、尖とがれり。花さ
き實なるとき、櫻桃とおなじ。花のしろきあり、
淡紅うすあり。

玉蘭花もくれんげ 紫白二色あり。花大なり。むらさきは、花
よからず。しろきをまされりとす。辛夷とぶしの臺に、
もくれんをつぎ、玉蘭花の臺に、こぶしをつぐべ
し。園史及遵生八牋に、玉蘭花をしるせり。此花
實なしといへり。花史曰、冬つばみを生じ、三月
に至て、花をひらく。糞水こんをそぐげば、花大きに
して、かうばしといへり。廣庭ひろにはにうふべし。せば
き所には、よろしからず。

三 月

桃花 種類多し。おほひとへ、千葉、うす紅、濃紅、白桃、緋桃、日月桃、垂絲桃しだれももあり。松江府志云、千葉にして大紅なるを、紅桃といふ。深紅なるを、緋桃と名づく。しろきを、碧桃と名づく。今案ずるに、紅桃花すぐれたり。しだれは、おほくは、白桃なり。日月桃は、又金銀桃とも云。倭俗に、源平桃とも、江戸桃とも云。一枝のうちに紅花あり、白花あり。あるひは、一花のうちに紅白相まじれり。八重なり。又實をうへて、當年すなはち花のさくあり。西王母、よろひごをしなごゝて、大なるもゝあり。又大桃あり、ともに果を賞玩す。油桃づばいももあり。其實常の桃より小さくして、つばきの實のごとし。又冬桃あり、雪桃と名づく。十月熟す。味もよし。伏見の桃林は、其ひろき事世に類なし。方十餘町あり。其所にしげき事、吉野の櫻

に勝れり。さかにひらくとき、人の目をおごろ
かす、○齊民要術に、桃をうふる法、熟したると
き、肉ともに肥たる地にうづむ。春に至て生ずる
とき、うつし植べし。ほる時に、本の土ともにう
つすべし。本土をされば、かれやすし。桃の性、
皮あつく急なり。故にうへてより四年以上は、刀
を以て、たてに所々其皮を切べし。よこに切べか
らず。かくのごとくせざれば、かるゝなり。凡桃は
三年に花さく。七八年に老ひ、十年にはかるゝ故
に、おひくゝに、毎年うふべし。農政全書曰、桃の
みを植るには、くきつきのかたを上にし、尖^{どがり}を下
にすべし。又いはく、はじめて實なりたる翌年、
其木をきる。其木又生ず。又きる。其後生じたる
をそだつべし。かくのごとくすれば、其根入深し
て、久しくかれず。社日根下の土をつきかたむべ
し。うつしうへて、つきやすし。うへて根をかた
くふみ付べし。根に糞をおく事なかれ。糞をおけ

ば、實ほそく、苦にがし。

海棠花 三月に花をひらく。艶にして愛すべし。二種あり。實あるは眞海棠なり。花ことによし。實のなり林檎に似て、やう小なり。夏秋熟しぬるとき、すこしあかくして、りんごのごとし。味も又りんごに似たり。實なきを、山海棠といひ。花眞海棠に及ばず。ともに正月にさすべし。よく活く。つぐには、ぼけの臺よし。梨なしにつぎたるはさかへず。木に蟲むし多く生ずる事あり。むし喰へば、木かじけて、花すくなし。雨後に蟲の穴より出たるとき、心がけてとるべし。唐詩畫譜にいふ、滓水かすをそそげば來春花盛なり。王禹耕が花譜に、海棠を花中の神仙と稱す。もろこしにて、古來尤賞翫するなり。花のつばみ、少ひらけかけたる時尤もよし。海棠のねふり、いまださめずとは、楊貴妃を此花のつばめるにたとへたり。

櫛け 木瓜ぼけの類なり。木瓜にはあらず。三月に花をひ

らく。紅花あり、淡紅花あり。又檳櫨めいさといふ物京都にあり。大木あり。俗、これをくはりんといふ。花はぼけに似て、實大にして、瓜のごとし。秋冬にいたりて、熟す。かうばし。味美し。是を用て、木瓜に代て其性同じ。材に用る花梨りんにはあらず。

梨 つぎてはやくなる。さしてもつく。つぎ木は、

正月芽めの出んとするときよし。三月に花をひらく。李白が詩に、白雪香しといひ、韓退之は千株の雪と稱し、東坡は一株の雪といふ。是皆雪に比せり。長恨歌に、梨花一枝春帶雨といへるは、楊貴妃を梨花に比せり。唐にはかく賞すれども、やまとには、さすがに此花をめもてあそで翫ぶ人なし。只其實のみを賞す。但唐の梨花は其いろすぐれたるにや。梨は百果の宗とて、このみの第一とす。味のよきあしき、其品多し。風寒あたらざるあたゝかなる所にうふべし。肥てやはらかなる地よし。堅き瘠地やせには、たとひ實なりても、味あし。黒土、

沙土によろし。堅土赤土によろしからず。かたき梢には、おほくは實のらず。花さかず。枝をたはめ、石を多くくうり付て、枝ひきくなれば、實のる。下枝を切べからず。尺にして花咲かざるは、切てつぐべし。

薔薇しやうび

かきいばらの事なり。かづらのごとく、かきにはひひろごりて、四五間ものぶ。其たてるは、灌木きのごとくなり。針多はりおほし。花は月季花ちやうしゆんに似て、はなはだ花おほく、うるはしくして、錦にしきのごとし。

遵生八牋曰、正月のはじめに、枝を長さ尺ばかりにきりて、さすべし。蟲生せば、銀屋しろかねやの爐灰をふりかくれば死す。唐人是を賞し、詩に詠せり。うす色の千葉あり。深紅こきの千葉あり。しろき千葉あり。しろくして、少くないをおべるあり。近年此類、又はなはだ多おほし。あげて記すべからず。なにはいばら、花しろく、ひとへにして、大なり。莖くきも大にして少しげれるなり。しげりやすし。野し

やうびは花ひとへなり。其實、こき紅なり。此花又よし。凡薔薇の類は、さしてつきやすく、移して枯やすし。小なるときに、根の土をつけてうつせばかれず。

月季花ちやうしやん 毎月花ひらく故、和俗に、長春といふ。只三月にひらくるは、花おほくうるはし。他月はこれにおよばず。さき出たるとき、色うすく、日を経て色こくなる。是もしやうびの類なり。花深紅なり。千葉、或ひとへなるあり。日かげあしく。日あてよき所にうふべし。老枝よりはなひらかず。わか枝より花さく。老枝は切さるべし。三才圖繪曰、月季花、俗に月々紅といふ。花ひらけて後、すなはち其へた帯をつみ去れば、花ひらけて、やむことなし。

玫瑰花はまなす 資暇錄、園史等、及李時珍食物本草に、是をのせたり。其性温、毒なしといへり。三四月に花をひらく。花紅紫なり。莖くきにちいさはり多し。おほ薔薇しやうびのるいなり。葉もしやうびに似たり。俗には、

花たちばなともいふ。分ちがふべし。年久しければかれ槁やすし。花はなはだ香し。好花なり。大なるは高さ四五尺あり。園史曰、凡花木つねにわかつによりしからず。只此花若枝新に生せば、早くわかつちうふべし。久しく置べからず。はやくわかつて、本木と共にさかへてよし。みぞのごろを以てつちかふべし。名花譜曰、其根のかたはらの雜枝はやくわかつち植べし。すなはち花じげくして、本木もかれず。

こやをき
酴醾花

此草、葉は覆盆葉くさいちどのに似て、莖方くきにして長く、

はりおほし。草くきなり。しやうび薔薇のごとくなる木莖に

あらず。花はしろき千葉にして、しやうびに似たり。又菊牡丹にも似たる故、西國にては、菊いばらといひ、關東にては、ばたん花といふ。三月にひらく。又花のうすあかきあり。尤よし。花はまれなり。陰地にはあしく、日あてにうふべし。其翌年花さく。三年を経たる老莖くきは枯かる。春の

終にさく花なる故、王荋猗が詩に、開至ケテ醠醠ニ花事ル了るといへり。其ほか古人の詩多し。詩人の賞翫する所なり。もろこしには、黄色なるもあるよし、格物論にかけり。農政全書にも、又一種黄花ありといへり。篤信今案に、にぎり酒の黄色なるを、醠醠いびろく醠ニといふも、此花の色に似たればいへるなり。

繅絲花をらんたねばら 遵生八牋云、花葉玫瑰花に似て、白うす紫なり。香なし。枝にはりあり。此花はるをらんたく紅夷より來る、故に名づく。

芫花しけいしゆ 小木なり。高さ二尺に過すきず。三月、紫花をひらく。藤の花の色に似たり。花ひらく時葉なし。花をちて後葉生ず。其花葉毒あり。喰ふべからず。世俗これを誤あやまりて、紫荊樹といふ。紫荊樹は、すはらぎなり。此物にあらず。

胡蝶花しやが 日かげをきはすして、よくしげり。三月花さく。春秋うふべし。鳶尾いちほうの類るいなり。

笑靨花^{こどめ}

遵生八牋にみえたり。花細にして豆のごとし。花のうち少くぼし。故笑靨と名づく。花しげくして、しろき事雪のごとし。葉まるくして、實なし。根よりむらがり生ず。分うふべし。

棣棠花^{やまぶき}

地によりて、花の善惡あるにや。からにては、さばかりの愛翫なし。わがやまごにては、めでもてあそぶ事甚し。古歌に多く詠ぜり。樹下陰地によりし。陽地にはさかへず。日にあへば、花の色枯て白くなる。八重をよしとす。ひとへはをこれり。拾遺集のうたに、わがやごの八重やまぶきはひとへだにちりのこらなんはるのかたみに。とよめるは、ちるをおしめるなり。山野に生ずるは、ひとへなり。又しろきひとへあり。黄白に色ざれり。凡やまぶきは、うへて籬とすべし。尤清玩なり。根まはりに、小便をかけてよし。

草棣棠^{くさやまぶき}

三月黃花をひらく。花の色棣棠のごとし。

※其かたちひとへにして、碗のかたちのごとし。二

月に葉生じ、夏にいたつて葉かる。ゆるね宿根又來春生ず。日をおそる。陰地よし。根下の土堅かたければさかへず。或盆にうふべし。草小なれども好花なり。愛賞すべし。

牡丹 もろこしにて花王と稱す。花の尤富貴なる物なり。張元素曰、牡丹は乃天地之精。すなはち爲三群花之首。篤信案するに。此花神農本草に載のせたり。上代よりありて、唐の世より盛に賞し、世人こぞつてこれを玩もてあそぶ。ことに詩人尤賞す。就中白牡丹を玩賞す。其品甚おほし。日本にて、いにしへ深見草とも、名とり草ともいふ。又此花のさく日數二十日をかざる。故二十日草といふよし。藏玉にみえたり。近年京都、及諸國の賞翫はなはださかなり。純紅、純白にして、そこなきを上品とす。其外佳品多し。おほ又冬牡丹あり。珍めづらし。草牡丹あり。遵生八牋云、牡丹は寒によりしく、熱をいむ。燥さうによりしく、濕をいむ。根は新土を得れば、さかん

なり。烈風烈日をおそる。地ひろくして陽にむかへ
る處によろし。うふるに八月社日の前、或秋分の後
二三日よし。天氣熱せばおそくうふべし。うふる
とき根下の舊土をほりのけて、細根をそこなふべ
からず。はなはだ高くうふべからず。又足にてふ
みかたむればあしう。又いはく、牡丹をつぐ法、
芍薬の根肥大にして、蘿蔔のごとくなるに、よき
牡丹の枝に芽あるをとりて、三四寸にきりけづり
て、のみの形のごとくにして、芍薬の根の口をわ
りひらき、さしはさみ、肥たる泥土どろを以て、きび
しく培つちかふ事、一二寸なるべし。すなはち活つく又法、
ひとへの牡丹の根を、二寸ばかり、うへより切きれよき
小刀にて半分をそぎさり、よき牡丹のわかき枝に、
めだち出べき處三五あるを一枝、これ又半分をそ
ぎさり、右のだいと一にゆひあはせ、麻おにてかた
くからげ、泥を以て麻のうへをぬり、外には瓦を
二たてあはせかこみ、其内に土をうづめ、來年に

いたりて、瓦をさり、草蓆を以てつくむべし。是牡丹をつぐ法なり。又曰、牡丹、冬はこもを以て覆べし。冬至の前後、鐘乳粉と硫黄とを末し、根をほりひらきて、まはりにおくべし。來春花さかんなり。うふるときは、白斂れんの末を土にませてよし。蟲くはず。むしくひたる穴あなには、硫黄の末を入、杉の木を、針のごとくけづりてさし置べし。蟲死す。或あなある所よりおりて、むしをとるべし。地肥こひたる所ならば、糞をおくべからず。また油かすなど置べからず。麝香桐油漆氣などをきらふ。根のまはりに草ある事をいむ。又まはりをふむべからず。遵生八牋にのする所、牡丹數十種皆名あり。其花様をしるせり。○歐陽永叔曰、つぐには八月社後、重陽の前よし。うふるには、ふる土を去、あたらしき細土を用。一枝より數花生ずるは、小をゑらびて去り、只一二花をとどむ。花をちては、やがて其莖くきをきり去て、子をむすばしむる事

なかれ。老やすきをおそる。園史云、ひとへの牡丹の臺^だに、千葉の牡丹をつぐべし。○本草綱目云。根下白歛の末をつけて、むしを去、むし穴の中に、硫黄を入れ、むしをころす。いかのかうを其葉にさせば必枯る。○月令廣義云、竹木をうふるには、何れも古土をつけてよし。只牡丹はふるつちをとどむべからず。○種樹書曰、凡花はみな春うふるによろし。只牡丹は、秋社の後うふべし。つぐにも其ときよし。○秋冬のあいだ、肥土を用ひて、根まはりの宿土にかへてよし。かくのごとくすれば。來春花多して盛なり。芍薬も同じ。○牡丹は糞をいむ。肥土には、油かすを置もあじう。糞をおけば、必いたむ。但糞を和したる久しき土を用、冬根まはりをすこしほりて、右の土を舊土^{ふる}にかへ、其上にあらぬかを置、寒をふせぎ、來年二月暖になりたるとき、ぬかをば去べし。或曰、牡丹は甚濕土をいむ。少地たかくうふべし。尤糞^{とへ}、

小便なごをいむ。肥たる黒土また黃沙土よし。根蟲あらば、さるべし。園史曰、牡丹、冬の間根まはりをはりめぐらし、糞水をそぐげば、花さかんなり。○牡丹に、小なるみの蟲多し。卒爾にはみえず。能^よみてとり去べし。是あればかじけて花すくなし。○牡丹の實をうふる法、洛記云、先五六月の間、かねて日かげの肥たる地をこしらへ置、七月以後よきばたんの實熟して、からのさけんとするとき、とりて地に早くまく。じげくまくべし。實をとりて、日をへだて、^ま蒔べからず。實かはきて、黒くなりたるをまけば、百に一も生せず。まして後、ときぐ水をそぐべし。糞をいむ。又和俗の説に曰、九月に地上に牡丹子を二ならべ置、其上にかはらけを一おほふべし。いくらもかやうにすべし。來春白根いで、芽生るとき、かはらけを去べし。十に八九は必生ず。又曰、七月初のうち、實の熟したるときとり、すなはちすぐにま

くべし。一粒づゝならべて、其上に大なるはまぐりのからをおほひをき、二月の中比、はまぐりのからをさるべし。あはびがらもよし。○實をうふるに、實をつちにて少うちて、ひづかしうふれば、生じやすし。又兩のはしを、といしにて少とぎ、あるひは小刀にて少けづりて、水にひさしくひたして後、うふれば生じやすし。實をば、日かげにうふべし。あるひはうへて後、松葉にておほふべし。秋うふれば、來春生ず。春生ぜざれば、秋生ず。

春生ぜずとて、すつべからず。○實生じて、其年はうつすべからず。來春よりしば／＼うつしかふれば、はやく花さく。しば／＼うつさぶれば、六七年にして、やう／＼花さく。はやく花さかん事をこのまば、しば／＼うつしうへてよし。○和俗の説に曰、牡丹をうふるには、九月の中比よし。あたかなる年は、九月十月はじめにもよし。凡牡丹根は、やはらかなる土にうふべし。根土のかたか

らざるがよし。或曰、五年に一度ほり出し、別の土にうふべし。しからざれば、子生せず。花のいろ香あし。根のかたまりたるふる土をさるべし。芍薬もおなじ。牡丹をほるとき、小根をそこなふべからず。根まはりより遠くほり、くいにてしづかにほるべし。凡牡丹は鐵をいむ。根に鍬などの鐵器をふるればあし。花を切にも、鐵刀を用べからず。冬は雪霜にいたまざるやうにすべし。○春つばみの付たるとき、はじめより目きして、十のうち三四は、花ひらかざるあり。それを早つみさるべし。のこれる花の精力をうばはずしてよし。芍薬もおなじ。○東坡が曰、牡丹花をみるに、午前よし。午後にはつばむ。篤信今案するに、牡丹をみるに、巳のときをよしとす。巳より後はひらけすぎ、花の精神をとりへちからなし。うるはしからず。午時より後にみるは、牡丹をしらざるなり。○篤信案するに、薬に用るには、ひとへの紅白を用ゆべ

し。八重、千重、雜色用ゆべからず、○或曰、牡丹は黒土、又あづ土にうふるによろし。又黒土を、あづ土にまじへたるもよし。或黒土二分砂一分まぜてよし。溝中のこえたる黒ごろを日にほしかためて、よくくだきてこまかにして、黒土にまぜて、うふるもよし。赤土、田土はあしう。土をこまかにして、かたまりたるはあしう。うふるには、根のさきかどまらざるがよし。根ぎはより一寸五分土をかふ。根の土をかたくすべからず。牡丹は凡糞こけを用べからず。砂地又やせたる地には。糞おきてもよし。或根の先の行所に、冬は馬糞をおき、正月するゑにさるべし。さらざれば蚯蚓みづ生ず。あるひは、小便に水をくはへ、少づゝ根の土にそゝぎ、又米の白水を、一兩度かけたるもよし。膠ていを多く養にて、汁を根にかくる。是牡丹のこやしなり。牡丹の莖に、蟲の入たるをば、その莖の半を小刀にてけづりさり、竹の釘を以て、蟲をさし殺すべし。

其あとは、やがていゑあふものなり。又莖の皮に、白蟲おほく付事あり。こゆるのけをゆひて帚とし、はささるべし。牡丹のつぼみ多く付たるとき、其中のかじけたるをさるには、つぼみのうへの方を半きりさるべし。つぼみを全くきるべからず。精氣のぼらずして、いたむ。凡牡丹は、紅白、むらさき、うす色を大綱かうとす。其うち品色おほくして、數百種あり。○園史曰、牡丹、芍藥の花を瓶にさすには、先枝のきり口を火にてやきこがし、其あとに、蠟をとろかしてぬりて、水にさすべし。數日しばます。

躑躅つとじ 三月に花をひらく。品類甚多し。もろこしにて、映山紅と稱するは、大霧島きりの類なるべし。小霧島。尤賞すべし。何れの地にもさかへやすし。其餘は土地によりて、よろしからざるあり。萬の木は陰地をいむ。只つゝじは、ひかげによし。砂によろしからず。はなはだ濕土いぢを忌。しかれども夏は水

をしばくそぐべし。おほくそぐぎ、濕おほけれ
ばいたむ。花をちて、すなはち其あとをつみさるべ
し。木さかふるなり。葉に水をそぐべからず。
水をそぐげば葉いたむ。つぐじの地はかたくなれ
ばあしう。山つぐじいろくあり。ひとへにして
赤きは、いづこにも多し。おほ淀川つぐじ、むらさきつ
つじ、所々の山にあり。凡つぐじをうふるに、赤土
の山より流出なれで、山下にあつまり、こまかにして
やはらかなるを取て、うふれば、はなはだしげる。
又魚のあらひ水を時々そぐべし。○つぐじは、
三年に一度古土をさるべし。根を水によくあら
ひ、別のやはらかなる新土に植べし。赤土にこま
かなるあづ土、或黄砂をまぜてうふべし。又田土
にあづ土をまじへて植るもよし。○つぐじのさし
やう、林下の木葉の、くさりたる所の肥土を取て
細末し、ふるひにてふるひ、つぐじの枝を三四寸
ほごにきりて、右の土にさすべし。しばく水を

澱^{そく}べし。日おほひし、或日かげにさす。必活^つく。又田土を用て、かげにさすも可なり。五月雨の中に、ひかげにさすべし。或曰、つゝじを八月に、日かげにさせば、かならず活く。來春芽を生ず。○つゝじをさす法、新芽の長じて、のびたるときよし。當年の新枝を短くきりてさすべし。節氣の遅速によりて、五月の半あるひは下旬、六月上旬なるべし。ふる枝あし。又法、ねばき赤土を日におほし、よくくだき、砂と等分にこまかにして、ふるひあはせ、かねてよりあつく敷をきて、これにさす。ときぐ、水をそそぎ、日覆^{おほひ}すべし。百さして百ながら活く。或曰、枝を土にうへて、土をかけてよし。不可^{さす}挾。又曰、箱にさして陰所におくべし。杜鵑^{さつき}花をさすも、つゝじとおなじ。

紫藤^{ふぢ} 三月のするゑ、四月のはじめにひらく。酒をこのむ。根に糞土、及酒の糟^{かす}をつちかふべし。さかへしげりやすし。花長からん事を好まば、つばみを

つみてへらすべし。藤をうふるに、根より生る
莖多きくさおほによりしからず。只一莖なるべし。莖多け
れば、精氣わかれて長じがたく、花おそし。はや
く切さるべし。○源氏物語藤裏葉曰、春の花いづ
れとなく、みなひらけ出る色ごとに、めをごろか
ぬはなきを、心みじかくうちすてゝ、ちりぬるが
うらめしうおぼゆるころほひ、此花の獨たちをく
れて、夏にさきかゝるほごなん、あやしく心にく
く、あはれにおぼえはべる。

花鬘けまん 葉は牡丹に似て、花はうすむらさきにして、
秋海棠のごとし。一枝に花つらなりて多し。三月
に花をひらく。根をわかちうふべし。風寒霜雪を
おそる。盆にうへて、寒月は屋下におくによりし。
又舊土をいむ。毎年うへかへてよし。しからざれ
ばきゆる。梅雨のうちに、枝をきりてさせば活
く。

榊まろめ 三月に花をひらく。其花海棠に似たり。鎌倉

海棠といふ。其實林檎のごとし。味はをとれり。

湿地によろしからず。赤土によろし。

鈴挂 すいかけ 一窠 かよ よりくき多くあつまり生ず。葉は柳葉に

似て、其かたはらのこぎりのごとくにしてあかし。葉の色うすあをく、花は房をなして、細に白色なり。はるのすゑに花さく。酴醾 とんみ より少はやし。庭に栽玩 うへ びて、殘春の餘景を助くべし。正月にさすべし。

白芨 しらん 葉は茅 ちかや のごとくにして、大なり。又蘭の葉に

似て。ひろし。三月むらさき花をひらく。倭俗、

これを紫蘭といふ。又一種、蕙 けい といふあり。紫蘭

と一類別種なり。紫蘭は葉ひろく、葱は葉せばし。

花相似たり。しらんは、こきむらさき、けいはう

すし。けいの花、しらんにまされり。又白蕙あ

り。此草古書に謂 い ゆる蘭蕙の類にあらず。倭俗

みだりに、しらんと名付たるなり、むらさきと、白

と一所にうふれば、白は枯る。別所にうふべし。

秋の比わから植べし。小便をそぐべし。陰地を
さらはず。樹下にもよし。一所にしげくおほくう
へてよし。

かきつばた
燕子花

福州府志に出たり。倭俗、あやまりて杜若
をばかきつばたといふ。杜若は別物なり。かきつ
ばたに、紫、白、黄、うす淡むらさきの數種あり。むら
さき、みどり翠なるは多し。おほ又四時に花ひらくあり。とも
に水中によろし。圃中にもうふ。水中にうふるに
はしかず。黒泥、田土によろし。大瓶かめにもうふべ
し。又石灰にて作れる小池にうふるもよし。わか
ちうふるに、はるの初、秋の比よし。和名を、かほ
よ花と云よし、藏玉にみえたり。

うちばつ
鳶尾

是かきつばたの類なり。關東にはこれを屋の
棟にうふ。大風に萱屋かやの棟を吹あらされじとな
り。又射干からすあぶぎとて、野草あり。同じ類なり。紅、黄な
り。をど劣れり。

しやくなしげ
石南花

葉は、とべらの葉、あるひは山もくの葉に似

て、大なり。花は芍薬に似て、小なり。其色うす紅にして、みるにたえたり。山の黒土或赤土によるし。砂土にうふればかる。冬よりつばみて、三月に花ひらく。

美人蕉 又紅蕉といふ。此花近年薩摩より出。今畿内所々に多し。寒をおそる。葉はうこんに似て、花は蓮のごとくにして、紅なり。其色火のごとく、榴花のごとし。其はしに、一點みどりなる所あり。春ひらけ、秋にいたる。十月より根をほりとりて、かまごにちかきあたゝか成所に、うづめやしなひ置べし。又たんごく花といふ物あり。これ又紅蕉の類なるべし。四月に花さく。

粉團花^{てまり} 木の花なり。葉は麻^{あし}のごとく。花はあぢさいに似て、かたち手まりのごとし。正月枝を切てさすべし。ひきく枝はとり木にすべし。花ひらくとき色しろく、後には青くなる。凡ひらけて後、色のかはるは、紫陽花^{あぢさい}、錦帶花^{はこねうつぎ}、粉團花^{てまり}等なり。

遵生八牋に、牡丹とおなじくひらく、牡丹と一所にうふべしとあり。

雪柳 葉は柳のごとくにして小なり。花は小にして、しろくひとへなり。一窠かよより枝多おほくあつまり生ず。枝のするゑに花多くあつまりひらく事、雪のごとし。高き事二三尺にすぎず。愛賞すべし。實なし。春根を分ちうふべし。また一種、うす紅なり。

茼蒿しゅんさく 倭俗、春菊といふ。其花菊に似たり。十月に子をうふべし。又正月にもまく。わかきとき茹ゆごとなし、食す。本草を考みるに、毒なし。

馬蘭はりん 一名蠡實、本草に、葉似ハ薤ガイニ而長厚クシ。三月開ニ紫碧花ヲ。五月結フ子ヲス。作ニ角子ヲ。如レ麻大而赤色有カト稜。

根可レ爲ハケト刷ハケト。叢生一本二三十莖。苗高さ三四尺。

○或これをかきつばたといふ。あやまれり。

白頭翁ねこぐさ 花は鈴のかたち似て、下にむかへり。内紫也。花の外にも、莖くきにも、白色多おほし。山野に生

ず。葉は艾に似たり。假山つきやまにうゆべし。

櫻草さくら 三月花をひらく。むらさき色あり、白色有、

淡紅黄色あり。花の大きさ錢のごとし。愛すべし。

紫は、蔓菁かぶらに似て小なり。寒暑をおそれ、濕を忌いむ。

消きふやすし。よく保護ほうごすべし。春秋のころわかちう

ふ。盆にうへて、寒月は屋下におくべし。又七重

草あり。同類なり。陰地をこのむ。

庭櫻 三四月に、花をひらく。には梅の類にして、

實なし。花は千葉なり。しろきあり、うすあかき

あり。木は高さ二三尺に過ず。八重櫻に似てちい

さし。花しげくして、みるに堪たり。根より叢生

す。根をわかちてうふべし。うつしうふるに、根

まはりひろくほりて、土を多くつけてうふべ

し。しからざれば枯る。正月にわかち植べし。二

月をすぎてはかれやすし。葉は、には梅、又は彼岸

櫻に似たり。

紫荊花さばうき 春こまかなるむらさき花をひらく。一所に

花多^{おほ}くあつまりひらく。花ひらく時葉なし。花史
曰、こやす事を好み、水をおそる。根のかたはら
に枝を生ず。長大なるときわかちうふべし。又曰、
其花毒あり、人を殺す。

蝦根^{えびね} 葉は初生のしゆろに似たり。又蘭に似て大なり。三月中のする花をひらく。もと山中に生ず。盆にうふべし。花の色、黄、白、かき、いろくあり。日かげによろし。赤土をこのむ。魚のあらひ汁を根にそぐべし。本草の藜蘆の集解をみれば、是に似たり。されども別物なり。

荒世伊登宇^{あらせいとう} 三月に、むらさき花をひらく。實落て生ず。春初又移うふべし。下品なり。或云、胡蘆巴なりと、非^ひなり。

仙臺萩 花黄なり。しげりやすし。或曰、昔^{もくしゆく}菴是也。草牡丹 花しろし。春秋にわかち植べし。

米囊花^{けし} ひとへなる紅白、むらさき、千葉の紅、白、紫あり。千葉なるは尤うるはし。三月のするひら

く。寒き所は四月ひらく。ひとへは實^み多く、千葉は子^みすくなし。沙がちにてやはらかなる土地によろし。かたき地には生ぜず。實をまきて、上に土をおほふべからず。はつきにてはらふべし。八月中旬にうふ。かねてより地を耕事數遍、日に干て後糞をしき、又ほして耕し、地をこまかにして漫^{みだりに}栽^{うよく}。或畦を立てうふべし。上にたなを作り、こもを以て日をおほひ、しばく水をそぐべし。生じて後、しげきを拔去てまれにすべし。苗しげきはあし。糞、水、小便をしばく澆べし。園史曰、うつしうふればしげらず。○苗生じて若所々不^レ生ば、又まくべし。○本草云、九月布^ミ子。居家必用云、九月九日又中秋日うふべし。○花落るとき、葉に蟲多く生ずる事あり。葉速かにとりさるべし。然らずば後に實を食し、又他菜にもうつりて、害をなす事多し。はやく葉をさるべし。

四月

菖蒲花

はこあやめ

葉も花も、燕子花かきつばたに似てちいさし。一類に

して別種なり。其色むらさきにして、みどりな

り。又白色、うす紫、色さきわけあり。古歌に、

あやめとよめるは、澤におふる菖蒲しやうぶとて、端午に

家をふく物をいふ。此あやめにはあらず。花をひ

らく事、燕子花より少遅ちそし。水泥の中、或濕地にうふ

るによろし。圃にもうふ。數年を経て、根かたま

れば、かしげて花よからず。秋の頃ほりをこして、

やはらかなる土にわかちうふべし。わかちうふる

には、秋によろし。

錦帶花

はこれうつぎ

やまうつぎとも云。籬まがきにうふべし。花はじ

めに白く、後にあかし。又ひえの山など、山城の

山に、山うつぎとてあり。別の一種なり。

鐵線花

てつせん

其くき、かづらにして、冬にいたりてかれ

ず。春葉を生じ、五月に花をひらく。花數品あ

り。まがきにはとむ。又風車とて、鐵線に似たる物あり。四月に花をひらく。てつせんにおとれり。鐵線の花は重葉也。風車はひとへなり。

石竹 古歌にも、順和名にも、なでしこ又とこなつといへり。○本草綱目を考ふるに、石竹と瞿麥くばくと

一物なり。時珍曰、田野生者花大如錢紅紫也。人家栽者小而嫵媚有數色。俗呼爲シデ洛陽花。○萬葉

集には石竹を、なでしことよめり。一物なり。いま野にある大なるをのみ、なでしこといふは、あやまれり。千葉を洛陽花シデといふ。やまとなでしこは、

野にある花、紅にして大なるものを云。からなでしこは、世におほき石竹をいへるか。野なでしこにも品類多し。古今集のなでしこをよめるうたに、

みどりなるひとつ草とぞ春はみし秋は色々の草にぞありける。草花譜曰、單瓣者名タンペンナル石竹ト。千葉者名ナル

洛陽花。又云、石竹須フ毎年シ起シ根テ分種。則茂ル。○

篤信曰、本草に、弘景は今市人皆小者を用とあれ

ば、藥には園の石竹の子みを用べし。去年うへしふる根より生ずるは、三四月に花ひらく。ふる根三年にいたればさがへず、多くは枯る。年々まきてよし。種をまくには三四月の頃やはらかなる地に、砂にませてうすくまくべし。苗なへしげくば、はぶき去べし。糞こへの上にまけば不レ生。只やはらかなる熟土じゅくとにまくべし。後に移栽うつしうふべし。春種をまけば其年に花ひらく。但春まけば、苗生じておほく蠹食きりむしす。六月のするゑ、七八月にまけば、蠹なき故長じやすし。それは、來年三四月に花ひらく。凡石竹は實のりて後、莖のいまだ枯ざるときに刈ざれば、其根かれず。若莖かれば、根も又おほくは枯る。故にはやく刈るべし。刈て後苗生せば、十二月の比又刈さるべし。來春の苗盛なり。毎年必根をわけて改うふべし。茂生ず。春より毎月まけば、秋のするゑまで花たえず。こやしは、ごろ水、小便などよろし。春苗長じて、みだれやすし。籬をゆ

ひて、はやく扶立すべし。遅ければ莖花亂雜らんざつなり。
盆にうふるもよし。○一種、をらんだ石竹あり。
花莖大にして花香し。五月に花ひらく。子みあり。春
まくべし。又十月に枝をさすべし。つねのなでし
こ、千葉の石竹も、枝をさせば活やすし。

虎耳草きしんさう

葉まるく毛おほし。蔓生つるじて小白花を開く。

倭俗、おほく園中の石上、あるひは假山つぎにうふ。

葉花共に愛すべし。しげりやすし。園史曰、はじ
めうふるとき、水をそゝぎ、つきたる時やむ。濕
をこのむ。かはけば枯る。

紅花 八月雨後に、熟地にたねをおろす事、麻を植
る法のごとし。苗生じて後馬糞ばふんをおくべし。苗を
とりてくらふによし。四月に花あり、曉をおかし
てとるべし。五月に實をとり灯油とし、車の油と
すべし。農政全書曰、たねを下をろすとき、灰或雞糞けいふん
を以ておほふ。濃糞こきはよろしからず。又四五月に
もくふべし。本草綱目曰、二月八月十二月みな植

べし。花を摘には、黄なるをとるべからず。赤く
なりたるをとるべし。

白丁花^{はくちやうげ} いと小なる灌木^{しげ}なり。木のたかさ二三尺。

花こまかにしてしろし。愛すべし。さして活やす
し。枝をみじかくきり、一所に多くさして、長短
心に任せて、かりてまがきにすべし。西國にてはば
んていしと云。

芍薬 此花、詩經に出たれば、上代より名ある花な
り。時珍曰。十月生^レ芽。至^レ春乃長^ズ。其品凡三十餘
種。有^二千葉單葉樓子^{やぐら}之^一異。月令廣義曰。十二月
芍薬をうつすべし。古今醫統曰、春わかちうふれ
ばすなはち根大なり。傍根すくなきもの、其莖大
にして花さかんなり。○遵生八牋曰、芍薬をうふ
るには、八月に根をおこし、土をさり、竹刀にて
わり、ほそ根をやぶる事なかれ。よくありつきて
のち人糞をそくげば、來春花さかんなり。三年に一
度わかつべし。○又曰、十一二月に雞糞に土を加^{くは}

へて土かふべし。花のとき、しの竹を立て、にすくべし。かたぶきたをるゝがためなり。雨ふらば、すだれを以ておほふべし。花すみやかにをちず。花をちて後、莖をきりさりて、元氣を根に歸らしむべし。花さかんなると、色のふかきと、皆つちかふと、根をわかつとの力によれり。芍薬の色、大抵、紅、紫、白の三品にして、今日本の芍薬凡百餘種あり。牡丹を花王として、芍薬を花相とす。其品位牡丹につげり。○赤土、田土によろしからず。黒土よし。又砂がちなる土をよしとす。冬三月、月ごとにのおの一度根まわりをほりて、人糞を厚くおくべし。小便を加へたるもよし。又馬糞もよし。根のうへには、人糞を置べからず。只馬糞をうすくおくべし。厚くおけば、めだちいたむ。○一説、芍薬に糞へんをする法、九十月めだちいまだ生ぜざるとき、まわりに土をおき、根のうへに土三寸おきて、其上に糞多く置べし。十二月には芽生ずるゆ

へに、糞を置べからず。芽のうへに糞をおけば、
たちまち芽かる。まはりをはりて、根の外に糞
を置べし。又二月に、三四寸苗のびたるとき、ま
はりに糞とほく置べし。或曰、つぼみはじめて生
ずるとき、根まはりに又糞をうすくおくべし。一
説に、春は糞を置べからず。又霜ふらんとする前
に、馬糞にひたりたるわらを、うへにかくれば、霜
にいたまず。莖多きはやせたる故なり。肥れば莖
少し。莖多きは、はやく切去て減すべし。花多し。
又花繁くば、つみ去べし。しからずば、花よから
ず。○花下の小枝を多くつみ去べし。精力をわか
つべからず。○花落て後、銅刀あかどねにて莖を切るべ
し。かくのごとくすれば、根に精氣早く収まり
て、來年さかへ、花さく。或曰、花過て莖をねぢて
まげおくべし。凡芍藥は、はなはだ、濕をいむ。又
鐵をいむ。莖をきるには、鋏を用べからず。根ま
はりをほるに、鍬の根にあたらざるがよし。竹木

のほりくひを用べし。土龍の用心すべし。其外病ひなく蟲なし。牡丹にくらぶれば、植やすし。

小藤 蔓生^{まん}ず。其花葉藤に似て小也。紅白二種あり。庭間にうへて、雅趣^{がしゆ}をたすくべし。

杜鵑^{さつき}花 四五月に花さく。品種甚多し。田土、赤土、あづつち、山つちによろし。砂土よろしからず。

あか土に肥たる砂土を、よくもみませ、うふるもよし。躑躅^{つじ}をうふる法におなじ。さしやうもつゝじに同じ。又大竹の管をわりて、枝をはさみ、其うちに肥土をみてゝ、ときどき水をそゝぐべし。八月以後、又梅雨のうちよろし。根生じて後、きりてうふべし。つゝじも同じかるべし。此説、園史にいでたり。又花史曰、春のはじめ、枝をおして地につけ、赤土を以て是をおほひ、枝生じて後、本をきりたち、來年わかちうふべし。月令廣義曰、陰所よろし。日をおそる。夏は水をしばゝゝそゝぐによろし。雨水尤よし。糞をいむ。又濕土をいむ。

○遵生八牋曰、肥たるをいむ。木かげにうふれば
しげる。園史にも、ふかき木かげにうふれば、み
ごり色愛すべしとあり。然るに或人のいはく、半
日ばかりは、日に當る所よし。日のあたらざる木か
げふかき所にうふれば、花はやくしぼみちる。又
園史曰、豆餅を水にひたし、黒色になるとき、杜
鵑花の根にそぐべし。○松島といふあり。花よ
しといへども、よろしからざる土地にうふれば、
必かるゝ。其外土地をきらふ杜鵑花多し。或曰、杜
鵑花は暑をおそるゝゆへに、しば草を根にうへて
よし。かくのごくすれば、おほひなくしても、日
にいたします。此説いぶかし。根に草生せば、あしか
りなん。○花史曰、陰地をこのみ、こやす事をき
らふ。樹下にうふるによし。川水をそぐべし。
熱をおそれて、冷をおそれず。

佛桑花^{さう} 花千葉にして、紅なり。牡丹に似たり。其
大きき手まりのごとし。是又薔薇の類なり。しや

うびにくらぶるに、葉小く枝みじかし。四月より
ひらけて、九十月にいたる。蟲多し。是をとるべ
し。正月あるひは梅雨のとき、枝をさすべし。よく
活く。

下毛しもつか 四月に細紅花をひらく。其花房はなぶさをなして、一
所にあつまりひらく事、女郎花のごとく、葉は、に
はむめに似たり。高さ三尺に過ず。一窠かぶより多く
あつまり生ず。正月にわかちうべし。古歌によめ
り。藻鹽草にみえたり。

卯花 四月の中の前後ひらく。庭にうえて籬つがきとし、
雅趣がしゆを助くべし。和歌に多くこれを詠ず。歌人は
なはだ賞して、是を雪に比せり。水をこのむ。順
和名抄に、洩䟽、一名は楊櫨、和名宇豆木とあ
り。今本草を考ふるに、洩䟽は、うつぎにあらず。
本草に、別に楊櫨をいだす。其子莢さやをなすことあ
り。うつぎはしからず。

虞美人草 芥子けしに似て小なり。其花艶えんなり。曾南豐が

虞美人草の詩あり。園史に、虞美人草は罌粟けしの別種なりとかけり。又麗春花と云。格物論曰、麗春は罌粟けしの別種なり。くき、やはらかにして針あり。紅紫白の三種ありといへり。ひとへあり、千葉あり、八重あり。魚のあらひ汁を折々そぐべし。

八月中旬にうふる事、けしをうふるごとし。

檀たん特花とく 葉はうこんに似て花紅也。實は蓮肉に似て堅し。糞類をいむ。胡麻の糟を以てやしなふべし。これ美人蕉の類なるべし。寒をおそる。冬は屋下におくべし。

五月

橘たちばな みかんの事也。四五月に花をひらく、古歌によ

める花橘是也。又花たちばなといはずして、たちばなのかほるともよめり。日本紀には香果かくたものとかけり。此品類すこぶる多し。橘の根まはり、海のごろ、あるひは、みぞせゝなぎのごろ、河のごろ、海藻な

どをおけば、さかへじげる。十二月に、枝のするの
下なる土をひろくのけて、糞を多くおき、其上に
土かふべし。土をのくるとき、いまして、細根
を切べからず。ほそ根をきれば、木はなはだいた
む。根を少にてもきらんよりは、糞を置ざるがよ
し。鍬を用てほるべからず。小便をこきぐそと
ぐべし。凡橘柑の類、皆はなはだ寒氣をおそる。
故に北國又は山中寒谷雪ふかき所にはさかへず。
うふべからず。園中にも北ふさがり、南にむかへ
る暖所によろし。黒きやはらかなる土、又海邊沙
地によろし。赤土堅土によろしからず。○橘譜曰、
がたの土よろし。冬は河ごろを以、其根に土かひ、
夏は糞を置べし。九年母も又同じ。橘柚の類、根下
に草あればさかへず。ことぐ 去てきよくすべ
し。あるひは曰、橘の根に棒を以て穴を多くつさ、
糞を入べし。木さかへて實多し。橘録曰、木のやま
ひ二あり。苔こけと蟲となり。これをさるべし。○橘

柑の臺木をうふるに、橙實だいぐのみを陰地にまきてよし。

高四五寸に成たるとき、ほり出し、根のするを切りて、圃はたの中あるひは籬まかきにうふれば長じやすし。根の末をきるは、小根を傍かたはらに生ぜしめんが爲なり。

金絲桃びやうのやなぎ 花は桃はなに似て、葉は柳に似たり。高さ二三

尺にすぎず、よくしげる。くきやはらかにこまかなり。梅雨のとき、黃花をひらく。しべ長し。金絲のごとし。正月に枝をきりてさすべし。よく活く。又春分の時根をわかつべし。園史畫譜、遵生八牋等に出たり。

鼓子花ひろかほ 旋花せんともいふ。其花白くして、淺紫なり。

そのかたち、牽牛花あさかほに似たり。又白花あり。五月の節の後に花さく。蔓生つるじてはなはだ繁茂はんす。其

根は賤民ほりとりて、煮て食す。

紫陽花あぢさい 赤土を好む。糞をおそる。夏日は水をしば

しばそくべし。陰地にはよろしからず、ひらく時白くして後に青し。夏至の後花さく。春のはじめ、

成は八九月わかちうふべし。又さしてもつく。夫木集に、あぢさいをよめる歌あり。

くちなし 梔

月令廣義曰、十月に梔の熟子をえらび、さらし

かはか 乾し、

來春二月に至て、これをうへ、灰土を以てお

ほひ、なすび 茄子をうゆるごとくすべし。

苗長し。次の

年うつし栽れば、四年にして實を結ぶ。名花譜曰、

夏月わか枝をおり、花をおびて、細土にさせば、

つきやすく、茂りやすし。○此花六出あり。他花は

五出なり。五月に花をひらく。水によるし。薬に

は、山にあるを用ゆべし。葉に蟲多し、さるべし。

史記貨殖傳に、梔子を多おほくうふれば、其富千戸

せんこ

侯こうとひとしといへり。實はよく熟し、霜ふりて後

とるべし。○一種花小にして、千葉なるあり。木

もひきく小なり。水梔といふよし、三才圖繪にみ

えたり。五月に花さく。花の香はなはだかうばし。

梅雨の中、あるひは正月に枝をさすべし。園史曰、

千葉梔子はさすべからず。只枝のうへに土を置、

おもしろを掛けて、とり木にすべし。根生じて、きり
てうふべし。凡此木はこゝろす事をこのむ。糞水をそ
そぐべし。枝をおりて瓶かみにさすには、つちにて根
をくだき、鹽を入れてさせば、花の色かはらず。う
ふるには陰地をいむ。青蟲好んで葉をくらふ。とき
ごきさるべし。實のる事はまれなり。花をとりて、
生にても煮ても食すべし。あるひはほして用ゆ。

剪が春羅んび 二月にうふ。本草に、二月に生レ苗、結レ實大
さ如レ豆内有二細子一、種レ之といへり。樹下日かけ
にうふべし。花紅黄色なり。剪せん秋羅をうの類也。

萱草くはんそう 二月うふ。あるひは、うふるに不レ拘レ時、根
をわかちうふべし。五月に花をひらく。時珍曰、

宜二下濕地一。其嫩苗キ及花跗作レ菹食トフ。詩衛風
伯兮篇曰。焉得二諼草一言樹二之背一。朱子詩傳に、

これをくらへば、うれへをわすれしむとあり。諼草
はすなはち萱草也。○壽親養老新書云、移二根一畦
中一稀種二一年自稠一。春剪レ苗食如二枸杞一。秋夏

不堪^レ食^ニ。○遵生八牋曰。單瓣^{タンベン}者可^レ食^フ。千瓣^{ヒトヘ}者食^バ之^ヲ殺^ス人。又曰。春可^レ食^ス苗^ヲ。夏可^レ食^ス花^ヲ。○下濕の地によろし。其花あしたにひらき、暮にし
ばむよし、本草にしるせり。

夏菊 其品類四十種ほごあり。冬根より苗を生ずる
を分ちうふる事、秋菊のごとくすべし。十月十一
月の頃わかちうふべし。つくりやう、大てい秋菊の
ごとし。又ほしいはしを末して、根まはりにおき、
あるひは小便をしはぐそぐべし。菊虎^{きくすい}秋菊よ
り多し。毎日辰の下刻より巳の半まで出、これを
さるべし。こへは人糞尤よし。糞をしはぐ多く
置てよし。冬春は人糞をおきていたまず。是秋菊
にことなり。其餘は秋菊に同じ。夏より秋にさき
つゞきて、愛すべし。

石榴花^{ざくろ} 花さく間に、又實のる故、韓退之が詩に、
五月梅花照^シ眼明^{ナリ}。枝閒時見實始成^{ニルノテコヲ}。と作れり。
單葉^{ヒトヘ}千葉あり。又其實甘きと、すきと、兩種あり。

千葉なるは實なし。人のかざり多きは、まことす
くなく、富る人は子すくなきかごとし。物二つな
がら、全き事なきのことはりをしるべし。枝をさ
し、あるひは根をわかつ。○農政全書曰、三月に
嫩枝を以て肥土にさし、しきりに水をそくげば生
ず。又曰、根のほとりに石をおけば、實多し。と
きどきしげき枝をきりさるべし。又いはく、肥る
事をこのむ。糞をそくぐべし。實をむすばざるに
は、木のまたあるひは根に石を置べし。○篤信曰、
根に石を多くつめば、實多くして大なり。○唐詩
畫譜曰、嫩枝のながく出たるは、きりさるべし。
暑月日中に水をそくげば、花盛なり。○さす法、
直なる枝、指の大きさのごとなるを、長一尺ばか
りにきり、下二寸をやき、穴をふかくつきてさす
べし。枝のかしらを二寸ほど出して、さして後水
をそくぐべし。

蜀葵 あひひ 本草を考るに、今人家にうへて花を賞するあ

ふひ是也。彙苑云、大明成化甲午、日本人からにいたりて、蜀葵をみてしらす。紙を以其花をるがきて、詩を題して曰、花於木槿花相似。葉與芙蓉葉一般。五尺欄干遮不盡。尙留一半與人看。とつくれり。異國にも、かやうに詩をよく作る者ありとてはめたり。此詩に作りしごとく、花は木槿に似て、深紅、淺紅、紫白色、單葉、千葉のかはりあり。春のはじめ子をうふ。冬月宿根も又自生す。五月節に入て、花さく。梅雨の半は、こずるに花さく頃なり。時珍云、葉嫩時、茹きて喰ふべし。

錦葵 せにあふい 又錢葵とも名づく。葉まろくして、錢のごとし。花うすむらさき也。うるはしくして、みるべし。○冬葵 こふひ は葉にまたあり。せにあふひにことなり、花小にして、みるにたらず。其子は藥に用ゆ。葉はわかきを食す。五菜の一也。

黃蜀葵 わうすか 二月に種を下す。あるひは宿子をのづから

生ず。あしたにひらき、暮にをづ。木槿むくげの花のごとし。花のかたち木棉さわたの花に似たり。紙をすくに、此草を用ゆ。其汁しるをころろといふ。

五月菊ごんぎく 五月みどり花をひらく。すこぶる菊に似たり。葉はよめがはぎに似たり。月令廣義に出たり。

鷹爪れだま 葉は柳葉に似て尖れり。黄花をひらく。閩書みんしよに出たり。又其莖木のごとくなるものあり。

合歡ねよのき 博物志に、此木を庭にうゆれば、人のいかりを除、愁康けいかうはこれを舍前いふのまへにうへじよし、みえたり。

又嵇康の養生論、崔豹が古今註にも、此樹人の怒をのぞくよしいへり。故にもろこしには、人家多く庭に植。其葉暮にいたれはとづ。故に夜合と云。ねふりの木と云も、此故なるべし。五月に花ひらきて、紅白也。上にいとすぢのごとくなる物あり。葉のわかきときは、ゆびまてくふべし。五臓をやすんじ、心志をやわらげ、よろこびたのしんで、

憂なからしむるよし、神農本草にみえたり。又葉をせんじて、衣ころもの垢かをあらふと、陳藏器はいへり。

六月

蓮 農政全書曰、うふる法、春のはじめ、藕の根をほりて頭をつづけ、池泥の中にうふれば、當年即花さく。小根は深水に不可種。長じて後深水にうふべし。糞あるひは豆餅をおけば、すなはち益ますますなり盛。
又曰、つよき糞をおけばあし。又曰、子みをうふるには、黒くかたき子を用ゆ。頭の芽生ずかる方を、といしにてすりて、うすくして、泥中にうふ。又曰、凡蓮は桐油をおそる。或ヨ、子をうふるに、繩にはさみ、泥中に其繩をはりおくへし。かくのこなくすれば、水底に根ふかくいり、又泥中にふかくおちいらすして、生じやすし。○又七月蓮子のはじめて熟じゅくして、やはらかなるとき、早はや泥中にうふ

れば、必生じやすし。遅ければかたくなりて、生じ
かたし。七月蓮根の節より、うきねを生ず。おり
てこれを種べし。居家必用曰、立夏の前蓮の根を
ほり、節頭をとつてうふれば、當年すなはち花さ
く。○時珍がいはいく、蓮野生及紅花は子多く、藕はすのね少
し。白花者子少く藕ねよし。其はな白きものはうる
はし。又曰、藕を煮るに、鐵器をいむ。蓮實をつ
きて、こにして米に和して、粥飯にす。輕クシ身益シ
氣、令ヲ人強健ヲ。○篤信曰、白蓮と紅蓮を一所
にうふれば、白蓮は消る。別にうふべし。或曰、
紅白まじへうふれば、すくなき物消る。紅蓮白蓮
ともに初めは小葉生じ、水面にしく。後には、大葉
生じて水面より高く出づ。大なる一葉を生じて後、
一花を其側に生ず。兩々相對す。故に藕ぐうといふ。
六月初より日を遂てひらく。花は卯の時の後より、
巳の時にいたりて漸ひらけ、午の後に漸合ふ。毎
日かくのごとし。其花兩日ありて、三日をたもた

す。唐蓮は少はひさし。ひらかんとしていまだひ
らかざる時、花觀賞すべし。○唐蓮は、近年もろ
こしより渡りて、世に漸多し。其品至て多し。其
花和蓮に勝れり。故に賞する人多し。其實を泥中に
うへてよくやしなへば、當年花さく。或來年さく。
盆にうふべし。盆の大小にしたがひて、花葉に大
小あり。小盆にうへても、花さく、三年すぎては
花の色變じて、和蓮のごとし。故に年を逐ふてう
ふべし。○唐蓮子を種る法、二月のはじめ、砥石トに
て蓮子の兩の尖をどがりとぎ、或小刀にてこそげ、肉に
ちかきまで皮をけづるべし。肉を損すべからず。
碗に入、水に浸し、日々にあて、日を経て三葉
生ず。此ときいまだうつし、うふべからず。後又
白根を生ずるを待て、泥中にうふ。三葉と白根生。
せざるうちに、泥土にうふれば、くさりて不_レ生。
又蓮子新に熟して、かたまらざるこき、はやく泥中
にうふれば、生じやすし。器にうふるに、大器に

も一根、小器にも、一根なるべし。大器にも二本う
ふれば茂^{しけ}らす。池中にありても、和蓮にちかくし
て、和蓮の根、唐蓮の根と一にはびこり入れば、唐
蓮は、かならず枯る。其年より器にうへたる唐蓮
は、三月節の初根をとり、節を二おきて折、一器
に一根うふ。當年に茂盛にして花さく。若しから
ずして、根多^{おほ}ければ、さかへず。深器にうふれば、
莖高し。淺器に植れば、莖ひきし。ひろき池にう
ゆれば、尤よし。はやくはびこりやすし。凡唐蓮
其類不^レ一。白あり、紅あり、はきかけ、口紅^{くちべに}あり、
かきいろあり。白きと口べにを上品とし、はきか
け次^レ之、紅は下品なり、いやし。白はまれなり。
豆を水にひたし、つきくだきて、蓮根におけば、
しげる。豆腐のかすもよし。鹽氣あるはあしう。
唐蓮さかへやすし。花も根もよきとて、近年は和
蓮をさりて、唐蓮をうふる人多し。凡蓮は人の垢^{あか}
汁^じ、膿血、六畜、諸獸の血肉をさらふ。蓮池に此

類入ればきゆる。必いみてとをざくべし。蘭の人のあかけを好むにことなり、浴よくしたる水、あるひは婦人の經水けいすいなど、蓮池に入ばきゆる。

百日紅 又紫薇花といふ。六月以後八九月まで花ひらく。紅艷にして愛すべし。其間百日計あり。蟲好んでくらふ。取去べし。○園史曰、小指にて其本をかけば、則枝葉ともにうごく。故に俗はくしやうじゆ怕痒樹ぱいようじゆといふ。倭俗にも、手を以其もとをなで暖むれば、風なくしてうごくといふ。ひろき庭に、一本うへて、しげらしむれば、甚賞すべし。此木皮うすし。俗に猿すべりといふ。古歌には、猿なめりとよめり。からの詩に多し。花紫紅なり。國史に、正月にわかちうへ、又さすべし。つきやすし。日をきらひ、陰をこのむ。

はねぬき
つまくれなひ
鳳仙花

女子の爪を染る草也。故西國にはつま紅といふ。二月に實をおろす。花の色紅あり、白あり、紅白相まじはる有、とび入有、紅黃あり、紅紫あ

り。又其花自變ず。此草小毒あり。牙^はにちかづくべからず。齒^はそんず。魚の肉のごとき物を煮るに子を數粒入れば、やはらかになる。魚の骨ののんごにたちたるに、此實を服すれば、しるしあり。故に骨拔といふにや。實をはやく取てすつれば、花ひさしくひらく。根に黒泥をおけば、さかへやすし。間とをにうふべし。每本相さる事二尺許なるべし。やはらかにて、しめりたる肥土によるし。燥高のかたき地に宜からず。

風蘭 潛確類書^二曰、桂蘭、一名は風蘭。土なくして生ず。小かごに入、樹上^一にかけをく。仙草と稱す。細花微香ありといへり。又五雜俎遵生八牋にいづ。山中岩のかたはらに生ず。是をこつて。櫻櫚^{しゅうろ}の毛にてからげ、樹下成檐下^一にかけ、ときぐく水を澆べし。水中に浸して。またかくるもよし。或曰、冷茶をそぐげばしげる。奇種なり。其花黃白にして、蘭に似たり。花史曰、露ありて日なき所にか

けおき、朝夕水をそぐべし。福州府志曰、風蘭は高樹に寄生す。其根は土につかず。難産する者、これを懸れば、産しやすし。

百合^{ゆり} 農政全書曰、二月にうふ。蒜を種るごとくすべし。鶏糞によろし。居家必用云、うふるとき、行をなし、ならべうふべし。糞を置水を澆べし。五寸に一科、後にとげくば、別畦にうつしうふべし。乾かば水をそぐ。三年の後大さ蓋^{こかづき}のごとし。年^{とし}つゐでをなしてうふべし。絶^{たひ}しむべからず。毎^{こゝに}坑^{あな}ふかさ五六寸、子を取てうふるもよし。四邊の草をさるべし。○本草に、百合新なるは、むして食し。煮て食し、肉に和して更によし。乾たるは粉にし、餅となして食す。尤人に益あり。○或曰、百合は三年に一度ほり出し、所を替てよし。○篤信案^{するに}、本草に、薬に用る百合といふは、花白きなり。倭に關東より、薩摩ゆりなごいふ類なるべし。又一種莖高して葉間に實生じ、秋紅黃花をひらく。上

に黒斑まだらの點ほしあるは卷丹也。藥に不レ入。卷丹は子をと
りおきて、零餘子ねかこをうふるごとく、春うふべし。
又土にうづみおきて、春うへてよし。又ひめゆりと
いふは山丹也。五月に花をひらく。姫ゆりは消や
すし。ひゆりあり。是ひめゆりの類也。花濃こき紅色
なり。ひめゆりは、むかしよりあり。凡むかしは百
合の品多おほからず。近年やうやく多し。ほとんど百
種に及ぶ。近年は百合の花を、世にはなはだ賞玩
す。凡世に人の賞玩するものは、物ごとに其好品よき
も、其品數も多おほく出来る物也。いにしへ善人多か
りしも、此故にや。○ひゆりなど、年々土をかえ
て改うべし。然らざれば、きゆる。ひゆりのたね
をまく法、地をかたくして、其上に實みをしき、上
に實みをおほふべからず。土をおほへば生ぜず。風
の吹ちらさんことを恐れば、上にわらをおほふべ
し。凡此類の實をうふる法、皆是におなじ。又林
中に、しかかくれゆりといふ物、葉ひろくして百合

に似ず。根は百合に似て、山民煮て食す。味百合のごとし。からの書にて未見ず。故に其性いぶかし。

凌霄花^{のうせん} 其つる長數尺のとき、木を得てよぢのぼり、松の木に多くははゝしむ。藤かづらのごとし。花黄赤色なり。夏秋花をひらく。花を鼻にあてゝかぐべからず。腦をやぶる。花上の露目に入れば、目くらくなる。

剪秋羅^{せんせう} 嵯峨の仙翁寺より出たる故に、名くといふ。秋花さく。がんぴよりまされり。此品類も、又近年多し。世人賞す。毎年土をかへて改うふべし。しからずば、さかへず。消やすし。花史曰、日影を好み、糞を恐る^{おそ}。肥土にうへ、清水をそゝぐべし。○名花譜に、鶏糞にてこやすべし。○或曰、樹下にうへてよろし。小便をそゝぐべし。

秋海棠 六月中よりさきそめ、秋にいたりて盛也。其花艶なり。尤玩賞すべし。此花いにしへ日本に

なし。正保の頃、はじめてもろこしより長崎へきたる。此草本草綱目にのせず。月令廣義遵生八牋等諸書にみえたり。○宿根ふるねより三四月の頃、苗を生ず。根は芋のごとく小にしてまるし。又子みをまくべし。年を経れば、莖はなほ長く、葉大なり。二三年をよこす。陰地を好む。北の屋がけ、かきねによろし。或盆にうふべし。子みをうへて糞をかくれば、常年に花咲。宿根より生ずるは莖大なり。うふるに毎本相さる事一尺ばかりなるべし。

○月令廣義曰、陰處に宜し。遵生八牋曰、一たび日を見れば、色すなはち變ず、

牽牛花あさがほ 花うす青きあり、濃青こくくして、紺色なるあり。

白色あり。赤花あり。立秋の前よりひらき、

八月に至。二月にうふべし。糞を不可用。はなはださかへやすし。多くうふれば、他の草木をさまたぐ。長じて早はやまがきを作りて、蔓つるを引べし。

糞土にうへて、肥て葉しげくれば、花みえず。瘦やせ

て葉すくなきをよしとす。やせ地にうふべし。つ
るをまがきに引にも、あらくまばら成がよし。こ
げきはあし。古歌によめるあさがほは、むくげ
也。此草あさがほは、古今に、けにごしとよめり。
されども順和名抄に、牽牛子をも、あさがほと訓
ず。

茶蘭 花香し。寒を恐る。冬は暖なる屋下に入置べ
し。しからずば、かごをしぶかみにてはり、風寒の
あたらざるやうにおほひてよし。春もはやく出し
て、寒氣にふるべからず。暑月にも、日中に日にあ
て、水をそくぐによろし。盆か箱にうへてよし。
冬は煎茶の温湯をそくぐ。熱湯はあし。夏のあ
つきとき花さく。其香蘭のごとし。此草むかしは
日本になし。近年唐よりきたる。

金沸草 おぐるま 花を旋覆花と云。小車の事也。宿根よりは
なはだ滋生す。二三月にうふべし。秋花さく。千
葉あり、單葉あり。千葉なる者可也。千葉も變じ

て單花^{ひとへ}になりやすし。但一度うふれば、はなはだ繁昌して、後には他草の妨となり、根をほりさるといへどもつきず。只かたはらにはびこらざるやうに、大瓶の中に底をうがちてうふべし。かならず圃にうふべからず。

萍蓬草^{かはほね} 水泥の中に生ず。葉長く、大きにして、其根蓮根のごとし。六七月に黃花をひらく。賞すべし。又おかかはほねといふ物あり。

慈姑花^{くはい} 水田にうふ。一枝のうへ數十花をひらく。根秋冬にいたりて取食す。冬春の間、ほりて根をとり、肥田にうふべし。多く^{おほ}滋生す。

鐵色箭^{なつすいせん} 冬春葉しげり、夏月に葉かる。五六月莖出て、花生ず。花あるとき、葉なし。花尤下品なり。

浮薔^{なぎ} 古歌にも、なぎとよめり。水あふひとも、澤桔梗ともいふ。水中に生ず。夏綠花をひらく。其花桔梗の花のごとし。花久しくさく。池のほとりにうふべし。三才圖繪に出たり。又花白きあり。

飛おにのまゆはき 廉

花葉大薊あざみのごとく、花白し。くき小にして、まはりに矢の羽のごとくなるものあり。

玉簪花きほうし

二月に苗を生ず。五月に一莖より、くき十計いづ。六月に花さく。人の喉のどに魚の骨たちたるを治ちす。牙はに著べからず、牙をつる也。毒草也。又一種、さぎ草といふ物あり。玉簪花の別種也。是もきほうしと云。○名花譜曰、玉簪花日かげを好む。陰地にうふべし。花ひらくとき、清水をそぐべし。